

『賦光源氏物語詩』を読む（九）

——若菜上・若菜下・柏木・横笛・鈴虫——

本 間 洋 一

三十四 若菜上

羹斯若菜催盃酌 あつもの 羹は斯れ若菜にて 盃酌を催す

盃酌孟陬令月朝 まうすう 盃酌 孟陬 令月の朝

我独寝愁応入夢 ぬめ 我が独り寝る愁へ 応に夢に入るべく

女三宮貌幾含嬌 かんばせ 女三宮の 貌 幾ばくか嬌を含める

曙聞清韻霞中鳥 かんばせ 曙に清韻を聞く 霞の中の鳥

晚引餘香花下猫 かんばせ 晩に餘香を引く 花の下の猫

蹴鞠庭間看粉黛 かんばせ 蹴鞠の庭の間に 粉黛を看

周章不識翠簾飄 かんばせ 周章して 翠簾の飄ることを識らず

（七律。朝・嬌・猫・飄（下平声蕭韻））

卷名は第一句に詠込まれている。若菜（上・下）の巻はこの

物語でも屈指の長篇である。前半の若菜上は、朱雀院が出家に際し、愛娘女三の宮の将来をあれこれと案ずる場面から始まる。

思い悩んだ末、結局は光源氏に後見を託すことになる。盛大な裳着が行われ、未だ幼さを残す彼女だが、光源氏が婿になると知らされた紫の上の心中は複雑だ。さて、年明けて、子の日に玉鬘が若菜を献上し、内々に光源氏四十賀宴が催され、音楽を樂しみ孫達に会うなどして、彼は己の老年を意識させられる（後に勅命による賀宴も行われる）。二月に女三の宮が六条院に迎えられ、紫の上の苦悩は深まり、冷静に対処しつつも、光源氏に対しては愛撫を拒むこともあった。朱雀院が山寺に移った後、院の愛し心残りに思っている臘月夜のもとに、光源氏は密かに通い始めた。須磨・明石への流浪は他ならぬ彼女との交情

に依るものであつたが、彼は「昔おぼえたる対面に、その世のことも遠からぬ心地」(④82頁6～7行)と性懲りもなく、抑制できぬ愛欲に拘とどまれる一方で、健気に振舞う紫の上の姿をいじらしく思う。彼は六条院に住まう女性達の平和と安穩を願ひはするものの、自らの情動がその苦悩を深めていることを知る由もない。後半は明石の女御の出産と明石の入道の入山をめぐり、入道の思ひの深さがその書簡と共に回顧を交えて語られ、それはあわれな夢語りのようでもある。その後は、夕霧が登場して紫の上の魅力を語り、六条院での蹴鞠の遊びに柏木と共に興ずる場面となる。その時である、女三の宮の御座所に猫が侵入し、御簾が引き挙げられて、柏木は女三の宮の姿に釘付けとなり、以後思いを募らせることになるという展開である。以下聯毎に訳を付してみた。

(四十の賀宴での) 吸い物は(玉鬘様が献上なさった) 若菜でございまして、酒杯もお勧めになりまして、(光源氏様が) 酒杯を手にしたのは正月の吉日の(二十三日子の日の) ことだったのでございます。

(女三の宮様が六条院に迎えられ、紫の上様は苦悩され御寝所でも寝つけず、これ迄も光源氏様が須磨明石に行かれ

ていた時もそうでしたけれど) お一人で悲しくやすんでおられたのですが、(女三の宮様のところにいらした) 光源氏様の夢枕にそのお姿が現われました(ので光源氏様も目醒め、急ぎお帰りになるのでございました)。その女三の宮様の御容貌は(と言えど) どれ程まだあどけなさを残したかわいらしさであつたことでもございましょう。

(さて、光源氏様は密かに旧知の臘月夜様を訪れなさつて、夜来口説き続けられますが、その) 明け方、霞かすみの中に清らかな鳥の声が聞こえるのでございました。(また、これは後の三月の六条院の蹴鞠遊びの条くだでのことですが) 桜の花の下に、(二匹の) 猫が出現し(追いかけて) ことしまして女房達を騒がせ、御簾の端が引かれて中が丸見えになることがございましたが、かぐわしい桜ならぬ) あふれるばかりの気高い可憐な女三の宮様を夕暮れに(柏木様に) 引き合わせる事となつたのでございました。

(その六条院の) 蹴鞠の行われている庭に(見守り楽しんで) 多くの女性達もおられましたのですが、(猫の狼藉に皆) あわてふためいてしまひまして、美しい御簾がひるがえつて(中が丸見えになつて) いるのに誰も気がつか

なかつた（というわけな）のでございました。

首聯は物語本文に、

さるは今年で四十になりたまひければ、御賀のこと、……

正月二十三日、子の日なるに、左大將殿の北の方（玉鬘）、若菜まゐりたまふ。

（④54頁14行～55頁4行）

と玉鬘が若菜を献上し、光源氏四十の賀が進み、

沈の折敷四つして、御若菜さまばかりまゐれり。御土器とりたまひて、

（かほらけ）

小松原末のよはひに引かれてや野辺の若菜も年をつむ

べき

（④57頁12～15行）

御土器くだり、若菜の御羹まゐる。御前には、沈の懸

（おほむあつもの）

盤四つ、御坏ともなつかしくいまめきたるほどにせられ

たり。

（④58頁9～11行）

などと記されることに関わるであろう。「羹」はスープのこと。

「世説」張翰字季鷹。齊王辟為「東曹掾」在「洛」。見「秋風起」、因思「江南菰菜羹鱸魚膾」曰、人生貴「得」適意、何能羈「官數千里」以要「名爵」。遂命「駕便婦」。俄而齊王敗。時人謂「之知」命見「機」。（「蒙求」487張翰適意。『世説』識鑑第10話他、諸書に見え、本文に多少異同あり）は名高い故事中に見える一例。

『賦光源氏物語詩』を読む（九）

「和「菜羹」而啜「口」、期「気味之克調」也」（菅原道真「扈從雲林院」不「勝」感歎「聊叙」所「觀詩序」『菅家文章』卷七『朗詠』卷上・子曰29『文粹』卷九・235）は名句として喧伝される本朝の例である。「若菜を献ずる風習は文献上では宇多・醍醐天皇のころから見え、醍醐天皇の延長二年正月二十一日、天皇四十の御賀は盛大で、この日、宇多法皇より若菜を天皇にさし上げている」（山中裕『平安朝の年中行事』「供若菜」、塙書房・一九七二年）のが早い例という。もともとそれに先立つ前掲道真詩序に、身体の調子を整え、無病の願いを込めるものであると記し、『荊楚歲時記』にも見えるものようであるからには、七種の菜の羹は恐らく本朝の民間で早くから行われていたものであろう。猶、前掲詩序の作者道真には更にそれに先立つ寛平五年（八九三）に「早春觀」賜「宴宮人」同賦「催粧」詩と序（『菅家文章』卷五『文粹』卷九244。谷口孝介氏は正月二、四日の作とする）もあり、宇多帝により子の日に宮女に賜る宴が行われたとも記す。女達と若菜に関わる故事として——『源氏』の古注には見えないが——記憶に留めるべきことではあるまいか。序と詩の摘句は『朗詠』（卷上・若菜34、卷下・妓女71～714）にも採られる程によく知られたものであったようである。

第一句末の本文を「盃酒」に作るものもある。それがむしろ一般かも知れないが、今は敢て蟬聯体よろしく（二句目冒頭を意識して）「盃酌」（さかづき。物語本文の「土器」^{かはり}に対応）の本文を採用する。「酌」は「杓」に作るも通用とみて良い。「王度讀論語」竟聊命三盃酌」（『菅家文章』卷一所收詩題）「清光入盃杓、白露生三衣巾」（『効陶潜体』詩十六首）其六「白氏文集」卷五）はその例。「孟陬」は「梁元帝纂要……正月孟春、亦曰孟陽孟陬」（『初学記』卷三・春）とあり、正月、孟春のことで、「春翫梅於孟陬、秋折藕於夷則」（源順「奉同源澄才子河原院賦」）『文粹』卷一・10）と用いられている。「令月」は吉日。「仲春令月、時和氣清」（張衡「歸田賦」）『文選』卷一五）とある李善注に「儀礼曰、令月、吉日。鄭玄曰、令、善也」と見えている。

鎮聯は、女三の宮を迎えた光源氏の一方で、紫の上が苦悩を深める条と関わる。

人や咎めむ、と心の鬼に思して入りたまひぬれば、御衾
まよりぬれど、げにかたはらさびしき夜な夜な経にけるも、
なほただならぬ心地すれど、かの須磨の御別れのをりなど
思し出づれば……（④67頁14行～68頁2行）

夜更かしするのも憚られる中で、かつて光源氏が須磨・明石に流浪した時に、ひとり寂しく悲しい夜を過ごしたことを紫の上は想い出す。その思いが通じたのであろうか、

かやうに思ひ乱れたまふけにや、かの御夢に見えたまふければ、うちおどろきたまひて、いかにと心騒がしたまふに、
鶏の音待ち出でたまへば、夜深きも知らず顔に出でたまふ。
（女三の宮の）い、といはけなき御ありさまなれば、乳母たち近くさぶらひけり。（④68頁11行～69頁1行）

紫の上が光源氏の夢枕に立つというのが第三句の背景である。第四句は、前掲文に見えるように女三の宮のあどけないかわいらしさを表現したものである。他にも、

姫君のいとうつくしげにて、若く何心なき御ありさま……。

（④27頁1～2行）

女宮は、いとうたげに幼きさまにて……みづからは何心もなくものはかなき御ほどにて、いと御衣がちに、身もなくあえかなり。ことに恥ぢなどもしたまはず、ただ児の面嫌ひせぬ心地して、心やすくうつくしきさしましたまへり。

（④73頁8～12行）

いとうつくしげにて……いと細くささやかにて、姿つき、

髪のかかりたまへるそばめ、いひ知らずあてにらうたげなり。

(④141頁6～9行)

などとも描写されてもいたのだった。「入夢」は夢にやつてくる、見る意。「平生憶念消磨尽、昨夜因何入夢来」(「夢」旧「白氏文集」卷一五)「莫怪腰围疇昔異、昨来入夢君容悴」(惟氏「奉和」擣衣引)「経国集」卷一三)はその例。「含嬌」は愛らしさを持つている意。女性のあでやかな姿態を表現した一節に「鴉黄粉白車中出、含嬌含態情非」(「廬照鄰」「長安古意」)とあり、「侍女扶起嬌無力」(「長恨歌」)「白氏文集」卷一二)とも見えるが、ここは艶冶なイメージではなく、女三の宮の可憐さを指して用いている。

頸聯の第五句は、光源氏が朧月夜を訪れた明け方の条に、朝ぼらけのただならぬ空に、百千鳥の声もいとうららかなり。花はみな散りすぎて、なごりかすめる梢の浅緑なる木立、昔、藤の宴したまひし、このころのことなりけりかしと思し出づる。

(④82頁13行～83頁1行)

とあるに依る。第六句は、かなり後に飛んで、六条院での花下の蹴鞠の遊びを見る場面と関わる。

御階の間に当たれる桜の蔭によりて、人々花の上も忘れて

『賦光源氏物語詩』を読む(九)

心に入れたるを、大殿(光源氏)も宮(螢兵部卿宮)も隅の高欄に出でて御覧す。

(④139頁1～3行)

とあり、柏木も「花乱りがはしく散るめりや。桜は避きてこそ」(④140頁1行)などと言いながら、女三の宮の居処に流し目を送る。すると、

唐猫のいと小さくをかしげなるを、すこし大きな猫追ひつづきて、にはかに御簾のつまりより走り出づるに、人々おびえ騒ぎてそよそよと身じろきさまよふ……(猫は)物にひきかけまつわれにけるを、逃げむとひこじろふほどに、御簾のそばいとあらはに引き上げられたる……。

(④140頁6～13行)

と、居処が丸見えになったのだった。この後桂姿で立つ女三の宮の可憐な様が柏木の目を通して描かれる(④141頁1～9行)わけだが、そのきっかけは猫がもたらしたものである。「餘香」はその場のあふれんばかりの桜花の香りを指すのであろう。その花下で猫の珍事が起ったことを一句は表現するものとみられる。「冷艶全欺雪、餘香乍入衣」(丘為「左掖梨花」)「新顰未全赤、晚瓜有餘馨」(「秋遊」原上)「白氏文集」卷六)「唇頭泛色金猶点、口上餘香塵半含」(「九日侍

宴同賦「吹_レ花酒_二」『官家文章』卷一）はその例。猶、「清韻」は清らかな響き、声の意で、清音に同じ（平仄の関係で「韻」を用いる）。「風竹散_二清韻_一、煙槐凝_二綠姿_一」（『官舍小亭閑望』）『白氏文集』卷五）「疎節往還繞_二長信_一、清音悽断入_二昭陽_一」（惟氏「奉_レ和_二掃衣引_一」『経国集』卷一二）などに見える。

尾聯は、前聯同様蹴鞠の場面を詠じたもので、第七句は、柏木が、

宮の御前の方を後目に見れば、例の、ことにをさまらぬけ
はひどもして、色々こぼれ出でたる御簾のつまづま透影な
ど、春の手向の幣袋……。（④140頁2〜4行）

というように、女房達の気配を見てとる様子、第八句は、前掲文中に見えたように、御簾の端から走り出る二匹の猫に、「人々おびえ騒ぎ」「御簾のそばいとあらはに引き上げられ」ていることに誰も気が付かず、「とみに引きなほす人もなし」（④140頁13行）という状態であったことをふまえ詠まれている。「粉黛」は化粧した女性（ここでは女房達）を指し、「廻_レ眸一笑百媚生、六宮粉黛無_二顔色_一」（「長恨歌」『白氏文集』卷一二）は名高い一例。「周章」はあわてうろたえること。「輕禽狻猊、周章夷猶」（左思「呉都賦」『文選』卷五）とある劉良注に

「周章夷猶、恐懼不_レ知_レ所_レ之」と見える。「翠簾」は御簾（の美称）のことで、「花樹当_二朱閣_一、晴河逼_二翠簾_一」（劉禹錫「和_二汴州令狐相公到_レ鎮改_レ月偶書_レ所_レ憶_一」）「蘭麝独薰鈿篋底、桃花猶寢翠簾中」（「菊叢花未_レ開」『江吏部集』卷下）などと詠まれている。

三十五 若菜下

太政大臣望致仕	太政大臣	致仕を望みたまふ
功成身退掛其冠	功成り身退きて	其の冠を掛けんとす
仙遊霞曲春隣近	仙遊霞の曲は	春の隣りに近く
臥待月光夜漏闌	臥し待つ月の光は	夜漏に闌はなり
妙法称揚誠不淺	妙法の称揚	誠に浅からず
遮那秘密語猶殘	遮那の秘密	語猶し殘る
上皇御賀御遊席	上皇の御賀	御遊の席
所恨金吾苦霧干	恨む所は金吾の苦 _{はは} 霧に干さるること	

〈七律。冠・闌・殘・干（上平声寒韻）〉

卷名は既に「若菜上」に詠込まれているからであろう、本作の中には見えない。この巻の物語は前巻末を受け、更に一層女三の宮への募る思いに突き動かされる柏木の情動から始まるが、

漢詩詠はそれを捨て、冷泉帝が讓位され、太政大臣が致仕する条から詠み始めている。その後、物語では紫の上の出家願望が語られ、次いで願ほどの為の光源氏の住吉參詣の盛儀が詳述される一方、紫の上は孤独感を深めてゆく流れになっている。そして、女三の宮に会いたいという老いゆく朱雀院の願いを入れ、光源氏はその五十歳の賀寿を計画し、賀宴の樂の為に女三の宮に琴を教え語らい、それに明石の女御（琵琶）紫の上（和琴）女御の君（箏）らも加わった合奏（女樂）へと展開して優雅な演奏のうちに、四人各々の美しさが光源氏の目を通して語られる。更に光源氏と夕霧の音楽談義をへ、光源氏も演奏に加わっている。その後、彼は紫の上の前に共に過して来た半生を回顧するが、彼女は「ものはかなき身」（④207頁11行）に「行く先少なき心地」（④207頁15行）を抱くばかりである。彼は多くの女性遍歴の中から、明らかに差障りなきようなものだけを選んで語る。それが契機になったのか、彼女は御胸を悩ませ（④212頁10～11行）、寝込み発作を繰返すことになり、途方にくれる光源氏。事態は後に更に深刻となり、彼女の危篤、六条御息所の死霊の出現に、死去さえ伝えられるが、何とか小康を得る。その間に、物語では別のストーリーもさしはさまれている。

即ち柏木の女三の宮への妄執であり、彼は小侍従を責め落とし、その手引きで逢う瀬を遂げるのだ。気分のすぐれない女三の宮を久方ぶりに訪れた光源氏はその懷妊を知るが、柏木の手紙を発見して二人の密通を察知する。彼は光源氏の視線に怖れ戦いて病み、次の柏木の巻で死ぬこととなる。以下聯毎に通釈してみた。

（冷泉帝が御退位なさったことを契機に）太政大臣様（葵の上の兄、玉壺の父）も辞職を望まれ、御仕事を成しとげ退かれることとなりました。

（朱雀院五十の賀寿の試樂が行われます六条院に光源氏様は女三の宮様と密通なさった柏木様を招かれ、その趣向を一層加えることができましたが）仙遊霞が演奏されますと（折からの雪が花びらが散るように見えまして）春もすぐ近くに来ていいると思われたことでございます。また、（正月に先に御賀の為の四人の方々の女樂が行われましたが、その折に光源氏様は夕霧様と音楽について語り合われましたその夜）臥待の月の光に（思いを催され、光源氏様も加わり演奏され）夜も盛りを過ぎますほどだったのでございました。

（心労の為に発病された紫の上様に加持祈禱等御修法を尽くされたのですが、危篤、死去と伝えられますものの、何とか小康を得たのですが、お苦しみは続いておりましたので）『法華經』の読誦供養（や不断の御読經）等おさせになりましたのは、誠に光源氏様の深い御心によるものでございますし、また（この巻が）真言秘密の摩訶毘盧遮那（大日如来）で言い止しておりますのも深い意味がございますように存じます。

（朱雀）上皇様の（五十の）御賀（は十二月二十五日に行われ、その）の御席に、残念なことに衛門督の柏木様は重い病に侵され（出席できなくなつて）おしまいになったのでした。

首聯は、

太政大臣、致仕の表奉りて、籠りゐたまひぬ。「世の中の常なきにより、かしこき帝の君も位を去りたまひぬるに、年ふかき身の冠を掛けむ、何か惜しからん」と思ひのたまふべし。

（④165頁2～5行）

とある条を背景とする。「致仕」は官職を退く意。白詩にもよく見えるが、「七十而致仕、礼法有明文」（「不致仕」）「白氏

文集」巻二）はよく知られた詩句で、「大夫七十而致事」（『礼記』曲礼上。鄭玄注に「致其所掌之事於君而告老」とある）をふまえる。「七十致仕（還君事也）大夫七十而致仕（致所掌之事於君而告老）」（『白氏六帖』巻一七・致仕）などとも見え、「奉傷致仕、藤御史」（『田氏家集』巻下）「爵位高登、終有致仕之請」（大江匡衡「寿考对策」『文粹』巻三・82）などよく知られた語。また、二句目は「功成名遂身退、天之道」（『老子』第九章）に依り、仕事を成し遂げたら居すわることなく退く意。「功成退身、五千言之玄訓在眼」（大江朝綱「為貞信公」辞、関白「第三表」『文粹』巻四・105）「功成名遂自由身」（『対酒勸令公』開春遊宴）『白氏文集』巻六六）などと用いられている。「掛其冠」（掛）は「挂」に通用）は、物語の古注に指摘されるように「逢萌挂冠」（『蒙求』に「後漢逢萌字子康、北海人。挂冠還世、東」）の故事により辞職する意。「挂冠、顧翠綏、懸車惜朱輪」（「不致仕」）『白氏文集』巻二）「羅逕契旧、欲為掛冠之棲」（菅原文時「為清慎公」請致仕表）『文粹』巻五・132）などよく用いられる表現である。

領聯は、共に音楽に関わる場面だが大きく前後する。第三句

は朱雀院五十の御賀の試楽が行われる条、

仙遊霞といふもの遊びて、雪のただいささか散るに、春となり近く、梅のけしき見るかひありてほほ笑みたり。

(④278頁10～12行)

が背景となっている。「仙遊霞」は大食調の曲で舞のない古楽の小曲(『河海抄』巻一三・若菜下)とされ、「仙人河」「仙神歌」ともいい、「斎宮拝行之時、勢田ノ橋上ニテ、樂人参向之時奏^レ之」(『教訓抄』巻六・無^二舞曲^一、樂物語、太食調「仙遊霞」)とも見えている。また、「春隣近」は物語本文をそのまま綴ったものに他ならない。確かに「冬ながら春の、となりの近ければ中垣よりぞ花は散りける」(『古今集』咽清原深養文)などの和歌を想起する(『紫明抄』巻七・若菜下『河海抄』巻一三・若菜下)のは当然のことだが、実は「春隣花思惟」(『類聚句題抄』89 紀齊名詩の句題)「楊柳春隣枝漸動」(藤原忠通「冬日即事」『本朝無題詩』巻五・322 などと王朝漢詩世界にもつながっている措辞だということも付記しておきたい。第四句

は、かなり溯つて、光源氏が夕霧と共に音楽を語り合う場面、「夜更けゆくけはひ冷やかなり。臥待の月はつかにさし出でたる」(④194頁10～11行)を先ずはふまえ、四人の女楽に光源氏

も加わるなどして遊びも果て、「大將殿(夕霧)は、君たちを御車に乗せて、月の澄めるにまかでたまふ」(④203頁5～6行)とあるあたりまでを意識しているのではあるまいか。「臥待月」は陰暦十九日の月のことで、出るのが遅い。その月も澄み昇った時間とみて「夜漏闌」と表現する。「夜漏」は夜の時刻。「睡少偏知夜漏長」(『自歎二首』其一『白氏文集』巻二〇)「燈下独居夜漏闌、四時寒暑任循環」(菅原在良「立春後单居」『本朝無題詩』巻二・197)などはその例。猶「闌」は盛りを過ぎてしまつてゐる意。「松寂風初定、琴清夜欲闌」(松下琴贈^レ客)『白氏文集』巻五五)もその意。

頸聯の第五句は、紫の上の発病、危篤、死去、そして蘇生と展開する中で、修法(加持祈禱・読経)が行われるが、殊に小康状態になった時の、

物の怪の罪救ふべきわざ、日ごとに法華經一部つ、供養せさせたまふ。日ごとに何くれと尊きわざせさせたまふ。御枕上近くても、不断の御読経、声尊きかぎりして読ませたまふ。

(④242頁6～9行)

あたりを背景にしていようか。また、第六句は、巻末の「例の五十寺の御読経、また、かのおはします御寺にも摩訶毘盧遮那

の」(④285頁3～5行)に依るであらうし、「問曰、物語のならひみな詞を残さざるをや、いまこの巻のをはりかくのごとし、如何。答云、言道断の心のうちほとむるかたなければ、真言秘密の摩訶毗盧遮那のごとし、といひはてたるこそ。この詞、又ふかき心あるべし……」(『紫明抄』巻七・若菜下)などに見えることとも関連しよう。「妙法」は『妙法蓮華經』、即ち『法華經』のこと。「称揚」は本来ほめあげる意だが、ここでは經文を唱える、講説するという程の意。「有為之悲難忘、不待三称揚之期」(大江朝綱「陽成院四十九日御願文」『文粹』卷一四・412)はその一例。

尾聯は、第六句とも関わるが、朱雀院の五十の御賀が行われたと記す巻末に、

御賀は、二十五日になりにけり。かかる時のやむことなき
上達部(衛門督の柏木)の重くわづらひたまふに、親はら
から、あまたの人々、さる高き御仲らひの嘆きしをれたま
へるころほひにて、ものすさまじきやうなれど、次々にと
どこほりつることだにあるを、さてやむまじきことなれば、
いかでかは思しとどまらむ。(④284頁12行～285頁2行)

とあるあたりを背景としていよう。「所恨」はうらめしいのは、

残念に思うのはの意。「所恨薄命身、嫁遅別日迫」(『続古詩十首』其一『白氏文集』巻二)は一例。「金吾」は衛門府の唐名で、ここでは衛門督の柏木を指す。また、「霧」はここでは心中のもやもや、苦悩を喩えた表現「雁の来る峰の朝霧、晴れずのみ思ひ尽させぬ世の中の憂さ」(『古今集』935 読人不知)「いぶせかりし霧のまよひもはるけはべらむ」(「橋姫」⑤151頁10～11行)「伏奉敵旨、鬱陶已散、如披霧觀青天」(『明衡往来』巻上・12)などという表現同様とみて良からう。

三十六 柏木

病中猶与侍従語	病中に猶し侍従と語る
鳥跡紛然書一封	鳥跡紛然たり 書一封
恋主独留庭柏木	主を恋うて独り留まる 庭の柏木
对人何答石根松	人に対ひて何ぞ答へむ 石根の松
霜寒相国老残鬢	霜は寒し 相国が老残の鬢
煙滅監門空去蹤	煙は滅す 監門が空しく去りし蹤
故宅既荒花早落	故宅既に荒れて 花早に落ち
只看新樹緑重々	只だ 新樹の緑重々たるを看るのみ

〈七律。封・松・蹤・重(上平声冬韻)〉

巻名は第三句に詠込まれている。この巻は、病み衰える柏木の苦悩に始まる。小侍従をかき口説いて女三の宮に手紙を差上げる一方で、致仕の大臣は息子^の為^に葛城山の修験者を招いて加持祈禱をさせるなど氣を揉んでいる。柏木は宮からの和歌を今生の思い出とし、返歌を乱れ書きして泣く。女三の宮は彼との不義の子（薫）を無事出産したものの、苦悩の果てに、父朱雀院の下で出家を果たし、柏木は見舞いに訪れた夕霧に心中を語つて世を去る。感慨に沈む光源氏や、柏木を回想する夕霧と致仕の大臣・落葉の宮の様子が語られ、柏木哀惜の章をもつて終わる。聯毎に訳すと以下になるう。

（柏木様は衰弱して死を思う）病の中でもなお（女三宮様への思いを募らせ）小侍従と語り合（い彼女への己の思いを伝えようとなさ）つたのでした。（女三の宮様の御歌のお返し^の）彼の一通のお手紙はあやしげな鳥の足跡かと思われる筆致で乱れ書きなされたものでございました。

（柏木様亡き後、後事を託された夕霧様は夫人落葉の宮様を訪れ）その庭に柏木（と楓が枝を差まわしているのを御覧になり歌をお寄せするのですが、お返し^の落葉の宮様の御歌）が主人（柏木）を恋い慕つてひとりこの地に留まっ

ている（というような思いを込めたも）のでございました。また、（二人の間にお生まれになった若君の五十日の祝いをなさる光源氏様は、二人の間の秘密を御存知でしたので感慨に沈んでおられました）出生の秘密を背負われた岩根（「言はね」を掛ける）の松ならぬ若君は、己の存在の由縁を人に問われて、何とお答えになることでございましょう（おいたわしいことと存じます）。

（柏木様亡き後の）父致仕の大臣様は（苦悩一入ならず）霜のように寒々とした老残の鬢毛の身となられてしまいましたし、柏木様は煙^{けむり}が消えてしまうように世を去つてしまわれた（ので皆傷み惜しまれた）のでございました。

柏木様の旧宅（で落葉の宮様が残されました）一条の宮は既に荒蕪^{あれ}で、花もつとに散り落ち、ただただ（夏の）若々しい木立が重なる緑（の葉）を見せているばかりなのでした。

首聯は、先ず病む柏木が小侍従を介して女三の宮への溢れる思いを手紙で伝える場面があり、答えた宮の返事を受け、彼が苦しい床から乱れ書きした書簡を認めるあたり迄を背景としていよう。本文を挙げれば、

かしこに御文奉れたまふ。……いまはとて燃えむ煙もむす
ほはれ絶えぬ思ひのなほや残らむ……侍従にも、懲りずま
にあはれなることども言ひおこせたまへり。……いまはと
聞くはいと悲しうて、泣く泣く、「なほ、この御返り。こ
れをとぢめにもこそはべれ」……。

（④291頁4行～292頁6行）

「紙燭召して御返り見たまへば……」「立ちそひて消えやし
なましうきことを思ひみだるる煙くらべに」……（柏木）
「いでや、この煙ばかりこそはこの世の思ひ出ならめ。は
かなくもありけるかな」……御返り、臥しながらうち休み
つつ書いたまふ。言葉のつづきもなう、あやしき鳥の跡の
やうにて、（柏木）「行方なき空の煙となりぬとも思ふあた
りを立ちは離れじ」……など書き乱りて……。

（④296頁3行～297頁4行）

というあたりであろう。「鳥跡」は文字のこと「史記。蒼頡、
黃帝時人。覩鳥跡、作文字也」（『蒙求』蒼頡制字）はよく
知られ、『河海抄』（卷一四・柏木）の引用はその省略と見て良
いだろうか（猶、『源氏物語』作者とほぼ同時代の源為憲『世
俗諺文』（上巻・218 鳥迹）では晋の衛恒『四体書勢』所引）。

「紛然」は乱れている様。「戦国從衡、真偽分争、諸子之言、紛
然、散乱」（『漢書』芸文志序）「六百八十所、無文之秩紛然」（三
善清行「立神祠・策文」『文粹』卷三、73）はその例。「書一
封」は手紙一通の意で、「言是商州使、送君書一封」（初
与三元九「別後忽夢見之……」『白氏文集』卷九）「今日因君
訪兄弟、数行郷涙一封書」（『江南送北客「因憑寄徐州兄
弟」」（同卷一三）など）とあり、「一封書到自京師」、借紙公
私読向隅」（『読家書「有所歎」』『菅家文章』卷三）と用い
られていた。

額聯第三句は、主の柏木を失った一条宮邸の落葉の宮を夕
霧が訪れた場面、

柏木と楓との、ものよりけに若やかなる色して枝さしかは
したるを、（夕霧）「いかなる契りにか、末あへる頼もしさ
よ」などのたまひて……この御あしらひ聞こゆる少将の君
といふ人して、（落葉の宮）「柏木に葉守の神はまさずとも
人ならすべき宿の梢か」……。（④337頁11行～338頁9行）

と歌を交わすあたりが背景となつていよう。また、第四句は、
柏木と女三の宮の間に生まれた薫の五十日の御祝いの後、光源
氏が尼姿の女三の宮に歌いかけた、

誰が世にか種はまきしと人間は、ばいかが岩根の松は、こたへ、む、
(④325頁2～3行)

を背景に詠まれている。「恋主」は主人を慕う意。「踊躍之懷、瞻望反側、不_レ勝_二犬馬之恋_一、主之情」(曹植「上_二責_レ躬_一詔詩」表)『文選』卷二〇)「不_三唯_二恋_一主、人_一、兼亦狎_二烏_一鶯_二」(「感_レ鶴詩」『白氏文集』卷一)「龍媒恋_レ主、整_二毫衣_一」(「郊外翫_レ馬」『菅家文章』卷二)のように動物に用いる例はまま見える。

頸聯の第五句は、柏木亡き後、夕霧が致仕の大臣邸を訪れると、

古りがたうきよげなる御容貌いたう瘦せおとろへて、御髭などもとりつくろひたまはねばしげりて、親の孝よりもけにやつれたまへり。
(④333頁11～13行)

と髪れ、とめどなく涙を流され悲嘆にくれている姿が描かれる場面があるが、それによるだろう。霜のように白い鬢毛のことは描かれていないが、老い髪れたイメージを強調したものである。また、第六句は、柏木が女三の宮と最後の歌の贈答を交わした場面(首聯の背景に引用)の、
(女三の宮)「立ちそひて消えやしなましうきことを思ひみ

だるる煙くらべに」……(柏木)「いでや、この煙ばかりこそはこの世の思ひ出ならめ。はかなくもありけるかな……行く方なき空の煙となりぬとも思ふあたりを立ちは離れじ」……。
(④296頁7行～297頁1行)

をふまえ、煙の消えるように柏木が亡くなったと表現する。「監門」は衛門府の唐名で柏木を指す。「霜」は「雪髪随_レ梳落、霜毛、繞_レ鬢垂」(「白髪」『白氏文集』卷二〇)「班白霜侵_レ鬢、倉黃日下_レ山」(「閑忙」同卷五八)「梳_レ霜、鬢髮蹉跎白」(藤原敦光「夏日即事」『本朝無題詩』卷四・265)というように老人の白髪 of 常套表現である。「老残」は老いさらばえた様子。「近前問_レ汝更辛酸、年紀病源是老残」(「重問」『菅家文章』卷三)とある。

尾聯は、第三句の場面とやや重なる。即ち、巻の末尾の、夕霧が落葉の宮を訪れた時の庭内の様子に、
四月ばかりの空は……「つ色なる四方の梢もをかしう見えわたるを……庭もやうやう青み出づる若草見えわたり、ここかしこの砂子薄き物の隠れの方に、蓬も所得顔なり。前栽に心入れてつくろひたまひしも、心にまかせて茂りあひ、
一叢薄も頼もしげにひろごりて……。
(ひとむすき)

（④336頁9行～337頁1行）

と、主人亡き後、その庭の荒れている様子が第七句に対応し、御前の木立ども、思うことなげなるけしきを見たまふも、いとものあはれなり。柏木と楓との、ものよりけに若やかなる色して枝さしかはしたるを……（④337頁9～13行）

とある処が第八句の背景となっているのではないかと思う。猶「花早落」とあるのは、時が既に「四月ばかり」であつたからであろうが、物語本文には花のことは一切触れていないので、詩作者が敢て時節を意識して表現したものということになる。

三十七 横笛

百鎰黄金資噓囀 百鎰の黄金 噓囀に資す

老親恐悦慰胸焦 老親恐悦し 胸の焦がるるも慰まん

先皇昔笛入夢惜 先皇が昔の笛 夢に入りて惜しみ

寡婦秋絃抑淚調 寡婦の秋絃 涙を抑へて調ぶ

素節涼風涼月砌 素節の涼風 涼しき月の砌

瓊林第二第三条 瓊林の第二第三条

枯花一片簾前落 枯れたる花一片 簾の前に落つ

幼子見之潜被招 幼児之を見て 潜かに招かる

（七律。焦・調・条・招（下平声蕭韻））

巻名は第三句に「笛」として詠まれている。この巻は柏木の一周忌の頃を扱う。光源氏が供養の為に黄金百両を寄進され、亡き柏木の老親致仕大臣も恐縮しつつ喜ばれ、亡き息子への焦がれる思いも慰むのであつた。出家した女三の宮のもとには朱雀院から山菜や和歌が届けられる一方で、その子薫はかわいらしく成長し、光源氏の心を和ませる。秋の夕、夕霧は亡き柏木邸を訪れ、母御息所と語らって故人ゆかりの和琴に触れなどする。すると、落葉宮が箏の琴をほのかに奏で、夕霧も琵琶で「想夫恋」を弾いて、和歌の贈答をし合うのであつた。彼が名残り惜しみつつ帰ろうとすると、御息所より柏木遺愛の笛を贈られる。帰宅後寝入った夕霧の夢に柏木が現れ、歌に託して、自分の子供にその笛を伝えて欲しいというのであつた。その後、夕霧は六条院の父光源氏を訪れ、明石の女御のお生みになった二の宮・三の宮（匂宮）と戯れ、薫の様子を見ては亡き柏木の面影を見てとるのであつた。父に一条宮でのことを報告し、柏木形見の笛のことを話すと、父はその笛の由来を語り、御自身で預られたが、それは子（薫）に伝えたいという柏木の思いを受けとめたものであつた。以下聯毎に訳出してみたい。

（光源氏様は故柏木様一周忌の）御供養の資として頂くべく黄金百両を寄進されまして、（柏木様の）老いた御両親も畏^{かしこ}りお喜びになって、亡き人を思いこがれるお気持ちも慰められたことでございましょう。

（夕霧様が一条宮を訪問された折、帰りに柏木様の母上より遺愛の由緒ある笛を贈られたのですが）それは昔先の帝（陽成院様）から伝えられました笛でございまして、夕霧様の夢に現われた柏木様は、御子孫に伝えたいと惜しまれたのでした。夫亡き後、落葉宮様は（折しも秋のこととして）秋の箏の琴のしらべを涙を抑えつつほのかに奏でなさったのでございました。

秋の涼やかな風吹き、涼やかな月の澄みきった折のこと（夕霧様は落葉宮様と歌を交わされ秋の夜ふけまで時を過ごされたのでございました）。また、（夕霧様は六条院を訪ねられ）瓊林ならぬ宮中の（輝ける）第二第三の枝（ともいふべき明石の女御のお生みになった二の宮・三の宮（匂宮）にお会いになられ、お楽しみになったことでございました）。

（薫様をじっくり拝見したことがなかった夕霧様は、若君

が御簾からお顔をお見せになった時）その簾の前に落ちた枯れた花の一枝を手になされ（お見せすると）、その幼い薫様はご覧になられて、人知れず（夕霧様の方へと）いらしたのでございました。

首聯は卷冒頭の柏木一周忌の条に、

御はてにも、誦経などとりわきさせたまふ。よろづも知らず顔にいはけなき御ありさまを見たまふにも、さすがにみじくあはれなれば、御心の中にまた心ざしたまうて、黄金百両をなむ別にせさせたまひける。大臣は心も知らでぞかしこまりよろこび聞こえさせたまふ。大将の君も事ども多くしたまひ……兄弟の君たちよりもまさりたる御心のほどを、いとかくは思ひきこえざりきと、大臣、上も喜びきこえたまふ。亡き後にも、世のおぼえ重くものしたまひけるほどの見ゆるに、いみじうあたらしいのみ思し焦がるること尽きせず。

（④345頁7行～346頁7行）

などとあるのを背景とする。「鑑」は重さの単位で、一鑑は二十四両を指すとも言うが、ここでの「百鑑」は「黄金百、溢尽、資用常苦多」（阮籍「詠懷詩十七首」其八『文選』卷二三。「溢」は「鑑」に通用）とあるように大金という程の意で、物

語本文の「百両」をふまえたものである。「達囃」（達囃も同じ）は財物を施入すること、供養の物を捧げる意（諷誦を読む役の人を指すこともある）。「性霊集」に「為前清丹州亡妻達囃」（巻七）「招提寺達囃文」「為亡弟子智泉達囃文」（巻八）等があり、「請達囃物事」（「文粹」巻一四・432）とも見えている。「資」はたすけとする意。「恐悦」はかしこまり喜ぶことで、「無仰以前欲相企参仕」、今故蒙嚴命、恐悦、悦」（『明衡往来』巻上・28返状）「恐悦之由、言上之处」（『中右記』長治二年四月十六日）はその例。「胸焦」（苦しみこと）は和習表現で、「螢火夏闌、胸陂焦而如灼」（『大北政所麗子為二一条殿御八講供養願文』『江都督納言願文集』巻五）はその類似表現の一例。

領聯は、秋の夕、一条宮訪問時に柏木遺愛の由緒ある笛をその母御息所から贈られ（④356頁14行～357頁2行）帰宅した夕霧の夢の条に、

すこし寝入りたまへる夢に、かの衛門督ただありさまの
桂姿にて、かたはらにあて、この笛を取りて見る。夢の中
にも、亡き人のわづらはしうこの声をたづねて来たると思
ふに、

（柏木）「笛竹に吹きよる風のことならば末の世ながき
音に伝へなむ

思ふ方異にはべりき」と言ふを、問はんと思ふほどに、若
君の寝おびれて泣きたまふ御声にさめたまひぬ。

（④359頁14行～360頁6行）
とある部分が第三句の下の句に関わる。また、巻末で光源氏が
その笛を夕霧より預ることになる条に、

その笛はここに見るべきゆゑある物なり。かれは陽成院の
御笛なり。それを故式部郷宮のいみじきものにしたまひけ
るを、かの衛門督は、童よりいとことなる音を吹き出でし
に感じて、かの宮の萩の宴せられける日、贈物にとらせた
まへるなり。（④367頁15行～368頁4行）

とあるのが上の句に関わるものとみて良いだろう。また、第四
句は、夕霧の先の一条宮訪問の折、落葉の宮が箏の琴をほのか
に奏でる次の場面が背景となつていよう。

秋の夕のものあはれなるに、一条宮を思ひやりきこえたま
ひて、渡りたまへり。うちとけしめやかに御琴なども弾
きたまふほど……（④352頁8～10行）
月さし出でて曇なき空に、翼うちかはす雁がねも列を離れ

ぬ……風肌寒く、もののはれなるに、さそはれて、箏の琴をい、とほのかに掻き鳴らしたまへるも奥深き声なるに、い
とど心とまりはてて、なかなか思ほゆれば……

(④ 354頁14行～355頁3行)

「寡婦」は勿論夫を亡くした落葉の宮を指す。「夢」郷還客展転臥、抱レ兒寡婦、彷徨立「山鷓鴣」「白氏文集」卷一二「寡婦独居欲ニ数年、容顔枯槁敗心田」(『新撰万葉集』卷上・恋歌二十首其二付載漢詩)はその用例。「秋絃」は秋の絃楽器(の調べ)。「容衰晚窓鏡、思苦秋、絃、琴」(酬張太祝晚秋臥病見レ寄)『白氏文集』卷九とあるのにより、「曲驚楚客秋、絃馥、夢斷燕姬晚枕薰」(橘直幹「蘭氣入」輕風)『天徳關詩合』『和漢朗詠集』卷上・蘭289とも詠まれていた。

頸聯の第五句は、既に触れたように夕霧が一条宮を訪れた条、即ち「秋の夕」の「月さし出でて曇なき空」の下、「風肌寒く」(前引原文参照)吹く折であったことをあまえて詠まれている。また、第六句は、夕霧が六条院を訪れて、光源氏の孫(明石の女御の子)達と触れ合う次の場面を背景としているよう。

女御の御方におはしますほどなりけり。三の宮三つばかりにて中にうつくしくおはするを、こなたにぞ、また、とり

わきておはしまさせたまひける、走り出でたまひて、(句宮)「大将こそ、宮抱きたてまつりて、あなたへ率ておはせ」と……

(④ 362頁10～14行)

二の宮の、若君とひとつにまじりて遊びたまふをうつくしみておはしますなりけり。……二の宮見つけたまひて、(二の宮)「まろも大将に抱かれん」とのたまふを、三の宮、「あが大将をや」とて控へたまへり。

(④ 363頁5～9行)

「素節」は「梁元帝纂要曰、白藏……節曰、素節、商節」(『初学記』卷三・秋)「籬媚還籠素節、光」(文室如正「菊残秋意留」『類聚句題抄』76)とあり、秋のこと。「涼風涼月」は秋風秋月の涼やかなことを表現するが、「涼月」はやや珍しい表現。次句との対を成す為の措辞でもあろう。「瓊林」は美しい林。「遥思兎園今日会、瓊林、滿眼映旂竿」(劉禹錫「和「樂天洛下雪中宴集」」)とある。また、「進入瓊林、庫、歳久化為塵」(「重賦」『白氏文集』卷二)は徳宗が奉天の行在所に建てた倉といひ、宋代には瓊林苑(乾徳二年(九六四)に置かれた)もあるのだ、恐らくここは宮中という程の含意であらう。橘広相の九歳昇殿の時の「暮春」詩の一節「荒村桃李猶応愛、何況瓊林華苑春」はその意で用いている。また、「瓊林第二第三条」

の一句そのものは、「卻説一枝」（『蒙求』）の故事に「晋書。卻説、字広基。拳賢良、対策為天下第一。武帝問之。卿才自以為何如」。説対曰、「臣拳賢良、冊為天下第一。猶桂林一枝、岷山之片玉」。今詞場折桂始於此也」（『世俗諺文』卷上「27折桂枝」もほぼ同文）とあるに遊んだものか。確かに美しい皇子であられる二の宮・三の宮（匂宮）様であるが、宮中の第一は薫君であることをこの句は表現しており、尾聯で薫を詠ずる流れを作っていると言える。

尾聯は、二の宮・三の宮が競つて夕霧に戯れる場面の後に、大將は、この君をまだえよくも見ぬかなと思つて、御簾の隙よりさし出でたまへるに、花の枝の枯れて落ちたるを取りて、見せたてまつりて招きたまへば、走りおはしたり。二藍の直衣のかぎりを着て、いみじう白う光りうつくしきこと、皇子たちよりもこまかにをかしげにて、つぶつぶときよらなり。……（④364頁9～14行）

とあるのをふまえるとみてよいであろう。

三十八 鈴虫〈横笛并之〉

弥陀脇士白檀像 弥陀の脇士の白檀の像

造立讃嘆授淨財 造立讃嘆して 淨財を授く
華構成風為我願 華構 風を成して 我が願ひを為し
蓮台何日与君胎 蓮台 何れの日にか 君と与に胎れん
（七言四句。財・胎（上平声灰韻））

本来七言八句であつたろうが、管見では四句しか見えていないようであり、巻名も後半の聯に詠み込まれていたものと思われる。この巻は、光源氏の発願により、女三の宮の御持仏の開眼供養が盛大に催されるところから始まる。六条院には親王ら多くの貴顕も参列し、帝や朱雀院始め、数々の寄進も届けられた。光源氏は女三の宮の出家を惜しみつつも、その生活を考えた。父院から賜つた三条宮の手入れを進める。八月十五夜、お勤めする尼君（女三の宮）のもとを訪れた光源氏は、鈴虫の声を耳にしつつ彼女と歌の贈答をし（巻名になる部分）、やがて管絃を催される。宮中での宴が中止になったことで上達部らも参上して楽宴は大いに盛り上がるが、退位された冷泉院からの管絃の宴の誘いもあつて、光源氏ら貴顕の一行は院の邸に参上し、詩歌にも興じられたのであつた。その後、彼は秋好中宮を訪れ母親の苦しみを除くべく出家を願う彼女に理解を示しつつも、思いとどまらせるのであつた。実は光源氏自身出家を思いなが

らも、今生に在らねばならぬ業を抱えていたのである。以下聯毎に訳すと次のようになるであろうか。

（持仏の開眼供養が盛大に行われましたが）本尊の阿弥陀様はじめ脇士の菩薩様などもすべて白檀を用いて像をお造り申し上げ、御仏の徳をおたたえして、供養なさり、人々の清らかなる信仰によるご喜捨の品がございまして、僧らも多くのお布施を授けられたのでございました。

美しく立派な御持仏堂（実は御帳台なのです）が技を奮つて巧みに造り上げられましたのも、光源氏様の願ひあつてのこととございまして、かの君は入道の姫君（女三の宮）様に対し、（来世）いつの日か共に極楽の同じ蓮の台の上に生まれかわりましょうと歌いかけられたのでございしました。

首聯第一句は、巻の冒頭に、

夏ごろ、蓮の花の盛りに、入道の姫君の御持仏どもあらはしたまへる供養せさせたまふ。このたびは、大殿の君の御心ざしにて、御念誦堂の具ども、こまやかにとのへさせたまへるを……阿弥陀仏、脇士の菩薩、おのおの白檀して造りたてまつりたる、こまかにうつくしげなり……

（④ 373頁1行～374頁1行）
とあるあたりを背景とし、第二句は更に、

例の、親王たちなどいともあまた参りたまへり。御方々より、我も我もといどみ出でたまへる捧物のありさま、心こにところせきまで見ゆ。……講師のいと尊く事の心を申して、この世にすぐれたまへる盛りを厭ひ離れたまひて、長き世々に絶ゆまじき御契りを法華経に結びたまふ尊き深きさまをあらはして、ただ今の世に才もすぐれ、ゆたけきさきらを、いとど心して言ひつづけたる、いと尊ければ……

（④ 377頁5～15行）
御誦経の布施など、いととろせきまではかになむ事広がりける。……夕の寺におき所なげなるまで、ところせき勢ひになりてなん僧どもは帰りける。（④ 378頁5～10行）

とある僧の弁舌や、喜捨の物多きことを表現した条をふまえるであろう。第一句の類型には、例えば「奉_レ造_二白檀阿弥陀仏像一軀、観世音菩薩、得大勢至菩薩像各一体」（菅原輔正「円融院四十九日御願文（始号朱雀院）『文粹』巻一四・415）などがある。「脇士」は阿弥陀の両脇に立つ菩薩のことで、先の願文中にあるように、観音・勢至を指す。「奉_レ造_二立金色釈

迦如来像一体」（大江維時「朱雀院被修御八講願文」『文粹』卷一三・406）「異口同音、讚、嘆、如来之相好」（大江匡衡「為仁康上人修五時講願文」（同上410）「抽淨財、以宛供養之費焉」（「不知願主多宝塔供養願文」『江都督納言願文集』卷五）は「造立」^{たつり}「讚嘆」^{たふさ}「淨財」（信仰心から喜捨された財貨）などの例で、いずれも願文にはよく用いられる語彙である。領聯は持仏堂の代わりになる御帳台の様子と関わる。巻頭から立派な品々が整えられていることが窺えるのだが、

……これはことに沈の華足の机に据ゑて、仏の御同じ帳台の上に飾られたまへり。堂飾りはてて、講師参上り^{まうり}、行道の人々参り集ひたまへば、院もあなたに出でたまふとて、宮のおはします西の廂にのぞきたまへれば、狭き心地する。飯の御しらひに……

（④375頁2～7行）

と、実は狭い空間に設けられたものだった。従つて、第三句のように「華構成風」という表現はややオーバーかも知れない。「華構」は美しい立派な建物（の様）で、「朱楊鬱起、華構方崇」（梁元帝「隱居先生陶弘景碑」『芸文類聚』卷三七・隱逸下）「梵宮華構、龜陰旧」（藤原明衡「夏日大覺寺即事」『本朝無題詩』卷九・665）はその例。「成風」は「郢人望、漫其鼻端」、

若蠅翼、使匠石斲^せ之。匠石運斤成^レ風、聽而斲^レ之。尽^レ聖而鼻不^レ傷、郢人立不^レ失^レ容」（『莊子』徐無鬼）の故事をふまえる。即ち、郢の人がその鼻の上に白い壁土をほんの少し蠅の羽のように薄く塗つて、棟梁の石に削りとらせた。石は斤を揮つてさつと削り去るときれいに土はとれ、鼻を傷つけることなく、郢の人は顔色ひとつ変えなかつたというもの。巧みな技を奮うこと、巧みに作り上げる意で、「為^レ成^二不日之功^一、可^レ催^二成風之声^一」（『明衡往来』卷下・49条）「漫揮^二越斧^一成^二風響^一」（源經信「賀大極殿新成」『本朝無題詩』卷一・7）などはその用例の一端である。猶、第四句は、前掲文の後、光源氏が、入道の宮に語りかける場面、

「……よし、後の世にだに、かの花の中の宿に隔てなくと思はせ」とて、うち泣きたまひぬ。

（源氏）は、ちす葉を同じ台と契り、おきて露わかるる今日ぞ

悲しき

（④376頁9～12行）

とあつて、来世共に蓮台に生まれ変わろうと詠んでいることに依ると思われる。「蓮台」は仏や菩薩の台座のこと。浄土に往生することを蓮台に生ずと言い、極楽浄土そのものを比喩する。菅原道真が亡き息子の冥福を祈つた句に「南無観自在菩薩、

擁^二護^一吾兒^二坐^三大蓮^一」(「夢阿滿」『菅家文章』卷二)とあり、和歌でも「けふよりは露の命も惜しからず蓮の上のたまと契れば」(『拾遺集』134実方)「ひとたびも南無阿弥陀仏といふ人の蓮の上にのぼらぬはなし」(同上134空也上人)などと見えてゐる。猶、「西方極樂、定登^二九品之蓮^一、台^二」(大江匡衡「為^二右近

中将源宣方^二四十九日願文^一」『本朝文粹』卷一四・425)「十方仏土之中、以^二西方^一為^レ望。九品蓮台之間、雖^二下品^一応^レ足」(慶滋保胤「極樂寺建立願文」『和漢朗詠集』卷下・仏事590)は蓮台(蓮華台)の語例である。

(続)